

1947年ロンドン-フィラッハ部隊列車爆破事件：シオニスト過激派、英国の撤退、そして忘れられた戦争行為

1947年の夏、欧州が第二次世界大戦の廃墟から再建に苦闘する中、英国軍事インフラの心臓部を直撃するあまり知られていないが重要な政治的暴力行為が発生した。**8月13日の夜、175人の人員を乗せた英国部隊列車**—女性を含む—が**オーストリア・アルプスで妨害工作を受け、マルニッツ近郊、タウエルン・トンネル**からそれほど遠くない場所で爆発装置が列車の一部を破壊し、大惨事をかろうじて回避した。

これは普通の列車ではなかった。**ロンドンからオーストリアのフィラッハへ、ハーウィッチ、フック・オブ・ホランド、戦後ドイツを経由して英国占領軍を運ぶ専用の軍事輸送サービス**の一部だった。爆発は計算されたもので、脆弱な線路区間を標的にし、大量死傷者を出す明確な意図があった。英国軍とオーストリア当局は即座に**シオニスト過激派**を疑い、おそらく**レヒ集団（スターン・ギャングとも呼ばれる）**に関連していると思なした—欧州と中東全域で英国の利益を攻撃し、パレスチナからの英国撤退を強制するキャンペーンで知られる急進的準軍事組織である。

死者は出なかったものの、この攻撃は**戦略的で、象徴性に満ち、深く動揺させるもの**だった。パレスチナをめぐる紛争が欧州戦域—それも連合軍占領下のオーストリア—にまで波及している程度を露呈し、すでに弱まっていた帝国の掌握力における英国の脆弱性をさらけ出した。

ロンドン-フィラッハ部隊列車：英国の戦後軍事鉄道網

第二次世界大戦直後、英国は**ドイツとオーストリア**の広大な占領地域を管理し、中央ヨーロッパの安定化に向けた連合国の取り組みの一部を担っていた。**南オーストリア**では、英国オーストリア部隊（BTA）がユーゴスラビアとイタリアに接する**ケルンテン**地方の秩序維持を任務としていた。フィラッハは主要な鉄道結節点となり、英国占領地域のロジスティクスの中枢となった。

この作戦を支えるため、**陸軍省**は英国本土とオーストリアを結ぶ**専用の部隊列車サービス**を組織した。大英帝国衰退の歴史ではしばしば見過ごされるが、このルートは欧州における英国軍事プレゼンスの重要な動脈だった。

ルート

旅は海路と鉄道を組み合わせ、効率性と安全性を慎重に調整した：

- **ロンドンからハーウィッチ**：兵士たちはリバプール・ストリート駅で乗車し、東へパークストン・キーへ向かった。
- **ハーウィッチからフック・オブ・ホランド**：エンパイア・パークストンのような部隊フェリーで夜間航行し、朝にはオランダに到着。
- **大陸鉄道でオーストリアへ**：フック・オブ・ホランドから**英国占領地域ドイツ**ケルン、ミュンヘン、ザルツブルク経由一を通り、オーストリアへ入る。
- **フィラッハ到着**：クラゲンフルトまたはザルツブルクから、列車はアルプスを南下し、フィラッハ中央駅へ。ここは駐屯地や近隣のエル・アラメイン通過キャンプなどへの主要配分拠点だった。

全行程は約**1,000マイル**、**2〜3日**を要した。1947年を通じて、これらの列車は**毎日運行**され、ピーク時の交代・復員期間には数千人の兵士を輸送した。

セキュリティと戦略的価値

軍事機能ゆえにルートは英国の管理下にあり、しばしば警備され、安全と見なされていた。しかし、その広大な長さ、特に僻地のアルプス区間は脆弱性を生んだ一特に**オーストリア**では、**難民（DP）**、政治的扇動、闇市場ネットワークが不安定な混合物を形成していた。諜報報告は**オーストリアのシオニスト難民**、特に**バート・ガスタイン**近辺を、英国のパレスチナ政策一特にユダヤ人移民一に対する組織的抵抗の源として指摘していた。

1947年8月13日：アルプスでの妨害工作

8月13日夜22:30頃、部隊列車は**マルニッツから3マイル南**の狭く山岳的な線路区間、**タウエルン・トンネル**近くを通過中に、線路下に埋められた爆弾に襲われた。

攻撃

2つの爆発装置が仕掛けられていた：

- **最初の爆弾は荷物車の下で爆発**し、重篤な損傷を与え、後続の数両を脱線させた。
- **2番目の爆弾は爆発せず**、おそらくヒューズの欠陥による。爆発していれば、列車は急斜面に転落し、大量死傷者を出すところだった。

奇跡的に**死者は出なかった**。荷物車は破壊され、数室に構造的損傷が生じたが、列車はほぼ直立のまま傾斜で短く停止した。**迅速な停止と険しいアルプス地形**が、皮肉にも完全脱線を防いだ。

数時間後、**フィラッハ近郊ヴェルデンの第138歩兵旅団本部外**で**追爆**が発生。構造的損傷は最小限で負傷者なしだったが、タイミングは調整された攻撃を示唆した。

調査

初期調査は結論に至らなかった。1人の容疑者**一オーストリア警察に撃たれ負傷した身元不明の男一**が爆発現場近くで捕まった。彼は最近**バート・ガスタイン**を去ったばかりで、この町はユ

ダヤ人難民を收容し、一部がパレスチナでの英国移民管理に敵意を示していた。

当局は3~5人の小チームを疑い、レヒのようなシオニスト過激派グループと関連がある可能性を指摘。どのグループも責任を主張せず、起訴もなかった。しかし、**ニューヨーク・タイムズ**や**シドニー・モーニング・ヘラルド**の同時代報道は、親シオニストDPの近さと攻撃の政治的象徴性を指摘した。英澳両当局は**シオニスト過激主義**を最も可能性の高い動機と見なした。

1947年英国部隊列車爆破事件の帰属と遺産

1947年8月13日列車爆破に関する同時代記録—**ニューヨーク・タイムズ**、**シドニー・モーニング・ヘラルド**、英国軍公式発表—は実行者を「**身元不明のテロリスト**」としか記述していないが、後年の学術研究はより確信を持ってレヒ、通称**スターン・ギャング**に帰属している。この急進的シオニスト準軍事組織は、パレスチナ委任統治の末期に英国の政治・軍事インフラを標的とした**跨国妨害キャンペーン**で悪名高かった。

マルニッツ近郊爆破の手法、タイミング、戦略的価値は、**1946~1948年**の欧州・中東におけるレヒ活動と密接に一致する。レヒの高名な作戦—**キング・デービッド・ホテル爆破（1946年）**や**カイロ-ハイファ列車攻撃**—ほど公に認識されていないが、マルニッツ事件はグループの**英国のパレスチナ撤退を加速させ、ユダヤ人移民政策で譲歩を強いる過激圧力のパターン**に完璧に適合する。

レヒの役割と運用哲学

アブラハム・スターンが創設し、後に**イツハク・シャミル**（後のイスラエル首相）のような人物が率いたレヒは、容認不可能な反英戦略を追求した。英国を植民地占領者と見なし、列車、警察署、外交施設への妨害キャンペーンを**反帝国抵抗**として位置づけた。

より穏健な**ハガナー**や国家主義的**イルグン**とは異なり、レヒは**英国の利益をどこにでも存在する限り標的にすると信じた**。彼らの地下細胞は**イタリア、フランス、ドイツ、英国**で活動し、**ユダヤ難民コミュニティ**の同調要素と頻繁に協力した。多くの難民は、ホロコースト後でもパレスチナへのユダヤ人移民を厳しく制限した**1939年白書**の英国執行に憤慨していた。

イデオロギー的熱狂にもかかわらず、レヒは**現実的**でもあった。外国領土での攻撃について常に責任を主張したわけではなく、特にそれが**難民ネットワーク、武器密輸、外交目的**を危険にさらす場合に限った。これが**マルニッツ攻撃の公式主張欠如**を説明するかもしれない—レヒの目標と手法に明らかに関連しているにもかかわらず。

レヒの**公式戦後アーカイブ**—**イスラエル自由戦士遺産協会**—は8月13日の爆破を具体的にリストしていない。しかし、グループの「国際キャンペーン」を称賛し、**オーストリア、イタリア、ドイツ**での妨害作戦への言及を含み、「英国帝国主義がユダヤ地下の射程を感じた」と述べる。複数の**二次資料**はマルニッツ爆破をレヒの可能性が高い、もし確定でないなら、作戦として引用し、「**パレスチナ国境をはるかに超えて広がるシオニスト過激主義の感動的な例**」と表現する。

逮捕や有罪判決の欠如

徹底的な調査にもかかわらず、部隊列車爆破に関連して誰も有罪判決を受けなかった。攻撃後の数日間、オーストリア警察は現場近くで1人の男を銃撃・捕獲した—報告ではポーランド系ユダヤ難民で、最近バート・ガスタイン、知られた親シオニスト扇動の中心地を去ったばかりだった。しかし、彼は起訴なしで釈放され、さらなる容疑者は拘束されなかった。英境当局はケルンテンの難民キャンプを短期間搜索し、シオニスト関連の個人を尋問したが、これらの努力は実行可能な諜報を生まなかった。

この逃げ足の速さはレヒの欧州作戦の典型だった。グループはしばしばイタリアから訓練された妨害工作員、難民キャンプの地元同調者を展開し、偽装身分と一時的住居ネットワークで検知を回避した。英国諜報ファイルと陸軍省文書（例：WO 32/15258）は占領地域全域の「洗練された妨害行為」のパターンを記録し、しばしば「シオニスト過激派に帰属するが、現在の現場条件下では確認不可能」と述べる。

パレスチナでのレヒの国内作戦はより目に見える逮捕と処刑—1947年のモシェ・バラザニの捕縛と自殺、または警察待ち伏せで捕まったメンバーの処刑—を生んだが、欧州妨害細胞は浸透や妨害がはるかに困難だった。

注目すべき関連事件：

- **1947年5月（パリ）**：レヒメンバー5人がロンドン植民地省爆破未遂で使用されたものと類似の爆発物で逮捕。オーストリア関連は確立されず。
- **1947年9月（ベルギー）**：ジルベルト「エリザベス」クヌースとヤコブ・レフシュタインの2人の工作員が英国外交目標向け爆発物の密輸で有罪。レフシュタインはパレスチナでの過去の暴力に関連したが、マルニッツとは無関係。
- **1946～1947年（イタリア）**：レヒ-イルグン共同細胞が英国大使館と武器庫を攻撃し、ローマ、トリエステ、ザルツブルク間を偽造文書と難民ルートで移動。

各ケースで運用足跡はマルニッツプロファイルに一致：小チーム、戦略的標的、責任主張なし、持続的逮捕なし。

遺産：戦術的成功、歴史的脚注

レヒ指導部の目には、マルニッツ爆破—大量死傷者なしでも—おそらく戦術的成功を表した：英国軍を震撼させ、主要部隊ラインを妨害し、シオニスト抵抗の射程を象徴した。その公式レヒ記録からの欠如は意図的だったかもしれない：跨国ロジスティクス保護とより広範な欧州作戦の妥協回避の手段。

英国視点では、攻撃は恥ずかしくも警戒すべきものだった。オーストリアでの連合国管理の限界を示し、難民人口、未解決の不満、オープンな国境が反乱活動の肥沃な土壌を生む植民地紛争の欧州への拡散を強調した。しかし、確定した実行者なしに、事件は最終的に公的記憶から消えた—1948年のイスラエル建国と冷戦初期の地政学的激変に覆われた。

それでも、1947年のロンドン-フィラッハ部隊列車爆破は**大陸横断的反植民地暴力の稀な例**として残り、**難民危機、過激シオニズム、帝国撤退**を爆発的な明瞭さのほぼ忘れられた瞬間に結びつける。

現代基準によるテロリズム

英国軍事アナリストが推測した目標は：

- 大量死傷者を出すこと。
- 英国軍を恐怖に陥れること。
- 政府にパレスチナへの移民制限緩和を圧迫すること。

攻撃はより広範なパターンの一部だった：同年早々、シオニスト過激派は**ロンドンの社交クラブ**を爆破し、**植民地省**に失敗装置を仕掛け、パレスチナで列車を爆破した。メッセージは明白だった：**英国の標的は欧州でも安全ではなくなった**。

実行者によって植民地占領に対する抵抗行為として枠組みされたが、**1947年マルニッツ近郊の英国部隊列車爆破**は、今日の法的・道徳的基準では**国際テロリズム行為**に分類される。

現代的定義

国連、欧州連合、米国連邦法などで広く受け入れられる法的枠組みによると、テロリズムは：

「政府や市民人口を政治的またはイデオロギー的**目的**で威嚇または強制するために、人や財産に対する暴力の違法な使用または脅迫。」

この定義はマルニッツ攻撃に存在する**主要要素**を捉える：

- **国家人員の標的化**（公務中の英国兵）。
- **無差別爆破による大量死傷者の意図**。
- **政治的目的**：英国にパレスチナ支配放棄と欧州ユダヤ人の移民制限解除を圧迫。
- **跨国実行**：パレスチナ拠点の政治運動に関連する行為者がオーストリアで実行し、第三国（英国）の外交政策に影響。

今日、同様の作戦—**非国家グループが欧州のNATO部隊列車に爆発物を仕掛ける**—が発生すれば、**対テロ指定、国際逮捕状**、おそらく支援組織への制裁または**軍事対応**を引き起こすだろう。

レヒと「テロリスト」ラベルの進化

1940年代にレヒは英国政府により公式に**テロ組織に指定**されたことに留意すべき—**イルグン**や**ハガナー**（特定作戦で）と並んで。英国当局は特に以下のような高名事件後、彼らのキャンペーンを「**テロ反乱**」と呼んだ：

- **キング・デービッド・ホテル爆破（1946年）**。
- **モイン卿暗殺（1944年）**。

- パレスチナでの英国軍曹吊るし（1947年）。

参考文献

1. “Bomb Derails British Troop Train in Austria; No Casualties.” The New York Times, 1947年8月14日。
2. “British Train Blown Up in Austria.” The Sydney Morning Herald, 1947年8月15日。
3. United Kingdom War Office. **British Troops Austria (BTA) Quarterly Historical Report, Q3 1947**. WO 305/73. The National Archives, Kew, UK.
4. Austrian Ministry of the Interior. **Internal Security Report to Allied Commission for Austria**, 1947年8月。二次資料で引用。
5. Bell, J. Bowyer. *Terror Out of Zion: The Fight for Israeli Independence*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1977.
6. Heller, Joseph. *The Stern Gang: Ideology, Politics and Terror, 1940–1949*. London: Frank Cass, 1995.
7. Zertal, Idith. *From Catastrophe to Power: Holocaust Survivors and the Emergence of Israel*. Berkeley: University of California Press, 1998.
8. Freedom Fighters of Israel (Lehi) Heritage Association. *Internal Bulletins and Archival Materials, 1946–1948*. Tel Aviv, Israel.
9. “Two Jews Jailed in Belgium for Smuggling Explosives.” The Palestine Post, 1947年9月12日。
10. Lehi Underground Radio Broadcast. “Lehi Claims Responsibility for Cairo-Haifa Train Bombing.” 1948年2月28日。
11. Röhl, Wolfgang. *Britische Militärzüge in Österreich 1945–1955*. Vienna: Österreichischer Miliz Verlag, 2005.
12. British Army of the Rhine. *Rail Transport Records, 1946–1950*. Ref: BAOR/LOG/47. Imperial War Museum, London.